市庁舎建築の設計論における領域構成からみた地域性

建築設計論における社会的枠組みに関する研究 (2)

THOUGHT ON LOCAL SOCIETY FROM THE POINT OF VIEW OF SPACE COMPOSITION
IN DESIGN THEORIES ON CITY HALLS

Study on social aspects in design theories of contemporary Japanese architects (2)

谷川大輔*, 佐々木英子**, 奥山信一***

Daisuke TANIKAWA, Eiko SASAKI and Shin-ichi OKUYAMA

The aim of this report is to illustrate what contemporary Japanese architects think of city halls through the investigation of their published articles after the Second World War. Firstly, the content of each article was considered, and some descriptions about community were extracted from each theory. Then, they were abstracted into two different levels; the level of the domain of representation and the level of the subject. Secondly, the domain of representation was classified into 6 categories. Addition each relationship of those categories was analyzed. And meanings of subject were analyzed by applying the method created by Jiro Kawakita. Then 7 groups of meaning were found. Next those meanings were divided into two different types; UNIVERSALITY and LOCALITY. Thirdly, a relationship between the subject and the area of representation was analyzed. Consequently, the change of that relationship in terms of time was considered.

Keywords : city hall, community, contemporary Japanese architects, design theories, KJ method

市庁舎建築、地域性、現代日本の建築家、設計論、KJ 法

1. 序

1.1 本論の目的

市庁舎建築は、わが国において第二次世界大戦後の地方自治行政に対する新制度の導入¹⁾から、地方自治体の財政規模や業務組織の拡大、その後の自治体の再編成などを受けて、全国的に数多く建てられてきた。それと同時に市庁舎建築は、行政の事務処理や議会の運営といった行政上の主な機能を果たす施設であり、地域社会における公共性を担う重要な建物であると言える²⁾。しかし現代において、市庁舎建築を設計する設計者が、こうした地域社会との関係をどのように考え、具体的な建築に反映しているかという思考の総体は曖昧であると言える。したがって本論では、市庁舎建築の設計論において、建築家が地域社会との接点として考えている具体的な場所を領域的に捉え、さらにその主題の意味内容を検討考察することで、建築家の地域における社会的枠組みに関する思考の一端を明らかにすることを目的とする。

筆者らは前報³⁾において、公共建築の設計論における主題の意味内容とその具体化の方法を検討することで建築家による公共性に関する思考の一端を示している。これは、建物と社会との接点をいかなる水準で捉えているかといった、建築家の社会的枠組みに関する思考のひとつとして検討、考察したものであった。これに対し本論では、公共建築の中で

も最も市民の日常生活に密接に結びついた施設のひとつである市庁舎建築の設計論を題材として、現代の建築家が建物と地域社会との接点をいかに捉えてきたかを検討するものである。この地域社会に限定した枠組みに関する建築家の思考をここでは、建築家の考える地域性として、その内容の一端を明らかにする。

1.2 既往の研究

これまで、近・現代におけるわが国の建築家の言説活動に関する論文では、例えば、大正期から昭和中期における建築家の言説を分類し統計的に考察することで、建築言語の変遷や関係性を分析し建築思潮の大筋を捉えるもの⁴⁾や、関東大震災以降5年間を日本のモダニズムの創生期と位置づけ、この時期の評論における批評対象と対批評対象との対置関係に着目して、建築家の言説の記述構造を捉えるもの⁵⁾などがある。また、市庁舎建築に関する論文では、例えば、事務所としての庁舎から市民に開放された「開かれた」庁舎を目指して、現在の庁舎機能の実態調査をおこないその問題点を探るもの⁶⁾や、市庁舎建築を外形⁷⁾および空間構成の形式から捉え相対的に位置づけるもの⁸⁾などがあげられる。これらの論文に対し本論では、現代日本の市庁舎建築の設計論を資料とし、複数の建築家の言説の意味内容を相対的に位置づけることから、建築家の思考する地域性に関する枠組みの一端を明らかにするものである。

* 谷川大輔建築設計事務所 工修

** 坂倉建築研究所 工修

*** 東京工業大学大学院人間環境システム専攻 助教授・工博

Daisuke Tanikawa Architects & Associates, M. Eng.

Sakakura Associates, M. Eng.

Assoc. Prof., Depart. of Built Environment, Tokyo Tech., Dr. Eng.

図1. 主題の意味内容の関係図¹⁶⁾

3. 接点領域における主題

つぎに、前章まで検討した個々の接点領域における主題の意味内容をKJ法¹⁵⁾に基づいて比較検討した。その結果、それらはいくつかの共通した意味内容を持ち、地域社会の発展を目指すことで住民の共有意識を高める『コミュニティの形成』¹⁷⁾と、他の地域との差別化をはかり、地域の特性や個性を表現することで住民の帰属意識を高める『アイデンティティの定着』の2つで大枠捉えることができた。『コミュニティの形成』は【利便性】¹⁷⁾【親和性】【共同性】の3つの枠組みとして、『アイデンティティの定着』は【象徴性】【文化性】【景観】【風土性】の4つの枠組みとして捉えることができた。それらを具体的な内容と共に図示したのが図1である。

3.1 『コミュニティの形成』

『コミュニティの形成』として捉えることができた内容のうち【利便性】は、「将来の変化に対応できる柔軟性をどう獲得するか (81-b) ¹⁸⁾」のように可変的で自由度の高い〈フレキシブルな空間を目指す〉¹⁷⁾。「まっすぐ歩いてそのまま市民が役所で仕事を解決できる (23-a)」、「ひとびとを円滑に事務部分へあるいは展示室へと処理していく (3-c)」など、市庁舎の利用の〈効率を高める〉。また、「一般のオフィスとは違う別の役割を果たしてこそ「シティー」と呼ぶに値する建築になります (77-a)」、「多様な空間機能の有機的な集合体として、建築を捉えた (37-a)」など、多様で複雑なニーズにも応えられるように〈複数機能の複合化〉を促すものなどがみられた。いずれも、市庁舎の利便性を高め地域住民に充実したサービスを提供することで、コミュニティの形成の中心機能を果たすことを考えるものである。【親和性】は、「広場が庁舎空間の開放化された内部空間である (35-d)」、「開かれた公共の

場として機能することが目指された (78-a)」などのように市庁舎の〈透明性・開放性を高める〉。「住民が気軽に立ち寄れる馴染みやすい場 (76-c)」、「公共施設が個人的なものにみえる親しみやすさ (81-c)」などのように〈親しみやすさを表現する〉ことで、市庁舎をより住民の身近にあるものにしようとするもの。また「用がなくてもゆったりと時間を過ごすことができる空間 (47-a)」、「長い冬を過ごす村民のための応接間 (52-b)」など市庁舎を訪れる市民が何らかの快適性(アイティ)を享受できる〈憩いの場を提供する〉ものなどがみられた。また、地域社会の活動や政治に〈市民の参加を促す〉ものなどもみられ、これらはいずれも、市庁舎の親近感を高め市民に密着した市庁舎を目指すものである。【共同性】は、「将来に向かって都市組織¹⁹⁾を形成するようなコンテクストを布石して行く (58-a)」、「近代的都市形成の核としての場をつくりだす (35-a)」のように地域社会における〈都市形成の核となる〉ものとして市庁舎を位置づけるもの。「庁舎職員、町議会議員と一般住民との人間的な接触の場 (35-c)」、「建物そのものの領域を拡張して大きな手をひろげることによって、いろいろな人びとに出会いの場を与える (39-a)」のように〈接触・交流を促す〉ことで市民相互の積極的な意思の疎通を目指すもの。「時に市民の集まりや市の行事の中心の場 (15-b)」、「多様なイベントへの活用 (63-d)」などのように市庁舎に〈多様なアイティをうみだす〉ことで地域の活性を促すもの。「市民のためのスペースを積極的に導入しようとして・・・集まりや憩いの場をつくりたいと考えた (17-a)」、「人が集まることにシボル性を見出す (76-b)」など〈集いの場をつくる〉ことそのものを主題とし、そのことが市民の連帯感を深めることに繋がるものとする。また「周辺の公共施設、都市公園と連携しバ

ことが期待されるに違いない。…市庁舎は、このような萩のシンボルとして役割をになうものであることは明らかである（44-a）」などは、市庁舎の建てられる地域について分析し、その地域の固有な事柄によって建築を位置づけようとするものである。これに対して、「こういう混沌とした都市空間に、新しい建物を投入する場合には、最初から連続感をとりあうことを放棄しなければならないだろう。そして、可能なことは、それ自体がひとつのシンボルを閉鎖系として成立させるような建築をつくることである。…建築はみずから象徴形式を所有して、アイデンティティを明確にするべきであろうと私は常々考えていたこともあって、シンボルをはっきりと建築に与えることが、この庁舎の設計の最初からの意図であった（49-a）」などは、市庁舎の建てられる地域に固有の内容ではなく、どこ地域でも成り立つようなテーマを標榜するものである。このような観点から、前章で検討してきた接点領域の主題の意味内容が《場所性》と《普遍性》のどちらの側面に立脚するかを再検討した。この検討結果は、先に示した図1において、上段を《普遍性》下段を《場所性》として表記している。その結果、『コミュニティの形成』は基本的に《普遍性》として、『アイデンティティの定着』は、ほとんどが《場所性》によるものが多かった²³⁾。しかし、『アイデンティティの定着』の中でも、【象徴性】に関する内容は、《普遍性》として語られることが多いことがわかった²⁴⁾。

4. 接点領域とその主題の推移

ここで資料とした論説を通覧し直すと、ひとつの論説で複数の接点領域及び複数の主題に関する記述を読みとることができるものが、全体の85%以上²⁵⁾であった。したがって建築家は、一つの市庁舎建築の設計においても地域社会との接点をいくつかの角度から捉えていることがうかがえる。そこで、資料とした市庁舎建築の設計論ごとに接点領域およびその主題を通時的に示したのが表2である。その結果、接点領域の主題における《普遍性》と《場所性》に着目すると、戦後50年代前半から70年代前半までは、《普遍性》を中心にどちらか一方について語られた論説が多いが、70年代後半以降から90年代前半までは、ほとんどが《普遍性》と《場所性》を同時に語っていることがわかる。さらに、90年代後半以降は、70年代前半までと同様に《普遍性》を中心にどちらか一方について語られた論説が多くなっている。この傾向をもとに、1950年代から1970年代中頃、1970年代中頃から1990年代中頃、1990年代中頃以降の3つの時期に分類し、論説毎の主題の推移を示したのが表3である。これらは、建築家の地域社会に関する思考が、基本的には一般化、普遍化を伴うことを前提として、1970年代中頃と1990年代中頃を境とし

て建築家の地域性に関する思考の大枠が推移していることを示している。この結果をもとに、1970年代中頃と1990年代中頃を境として接点領域とその主題の推移をまとめたのが表4である。この表から主題の《普遍性》は、50年代前半から70年代前半までは【象徴性】が中心に語られ、70年代後半以降は、その中心が【親和性】【共同性】といった内容に推移していることがわかる。これは、地域固有の内容と関わりなく成立する普遍的な主題は、70年代中頃を境として、アイデンティティの定着からコミュニティの形成へとその内容の中心が推移したことを示し、70年代前半に訪れた高度経済成長のかげりが、市庁舎建築一般に関する建築家の思考に与えた影響のひとつと考えられる。また《場所性》は、70年代後半から90年代前半において【景観】【文化性】に関する内容が多いが、90年代後半以降は【景観】に関する内容がほとんどみられなくなった。これは、90年代前半までさまざまな思考されてきた景観に関する考え方も、90年代後半以降は均一化・画一化して地域固有の問題として建築と結びつけて思考することが難しくなったことを示すものと推察できる。また《場所性》の『アイデンティティの定着』に対する『コミュニティの形成』の割合をみると、少ない資料数ではあるが90年代中頃を境に『コミュニティの形成』の割合が高くなったこと²⁶⁾がうかがわれる。これらは、建築家の地域社会に関する思考が、地域との関わりとして成立する内容も、90年代中頃を境に『アイデンティティの定着』から『コミュニティの形成』へと推移していることを示している。これは、90年代に入りいわゆるバブル経済の崩壊とともに市町村の過疎化、少子化、高齢化などの問題が本格的に顕在化して、コミュニティそのものの存続に対する社会的危機感が高まり、そうした社会的状況を反映して、90年代後半以降は相対的に『アイデンティティの定着』に関する建築家の意識も希薄になってきたことを示すと考えることができる。次に、接点領域の広がりについて着目すると、90年代後半以降に、単数領域に比べ複数領域の割合が比較的高くなり²⁷⁾、敷地外と関係をもつハは【隣接】から【隣接】へとその内容の中心が推移していることがわかる。このことは、近年の建築家の地域性に関する内容が、領域相互の関係へと重心が移り、とくに敷地外の領域から建物の内部領域を含めた領域の階層的連続性へと推移していることを示している。

表3. 論説毎の主題の推移

年代	《普遍性》のみ	《普遍性》+《場所性》	《場所性》のみ	合計
1952 ~ 1974	21	17	5	43
1975 ~ 1995	3	25	2	30
1996 ~ 2003	7	6	3	16

表4. 接点領域とその主題の推移

年代	主題												接点領域の広がり											
	《普遍性》						《場所性》						イ			ロ			ハ					
	コミュニティの形成			アイデンティティの定着			コミュニティの形成			アイデンティティの定着			敷地内			敷地外								
	利便性	親和性	共同性	その他	象徴性	景観性	文化性	風土性	利便性	親和性	共同性	その他	象徴性	景観性	文化性	風土性	その他	単数領域			複数領域			
	A2	B	C	D	隣接	隣接	隣接	隣接	A2	B	C	D	隣接	隣接	隣接	隣接	隣接	隣接	隣接	隣接	隣接	隣接		
1952 ~ 1974	11	20	17	2	31	3	0	0	0	2	3	6	5	8	5	1	2	22	16	14	23	2	15	20
	(50)				(34)				(5)			(25)					(54)			(25)		(35)		
1975 ~ 1995	7	24	11	4	13	0	0	0	1	4	6	9	14	16	9	0	14	23	13	8	17	5	10	28
	(46)				(13)				(11)			(48)					(58)			(22)		(38)		
1996 ~ 2003	6	16	9	1	2	1	0	0	0	3	4	4	1	6	2	0	7	2	3	8	11	4	15	5
	(32)				(3)				(7)			(13)					(20)			(15)		(20)

NO. 77 林昌二『田の字のわが家・シイホー』掛川市庁舎
■接点領域
→ A1-A2
一敷地内・複数領域

●主題
一「利便性」「普遍性」

NO. 77 林昌二『田の字のわが家+市庁舎』掛川市庁舎
 ■接点領域 ●主題
 → A1-A2 → 【利便性】《普遍性》
 → 敷地内・複数領域

表 5. 接点領域の広がりとその主題の対応

主題		接点領域の広がり						表の見方
		イ：敷地内・単数領域		ロ：敷地内・複数領域		ハ：敷地外・複数領域		
《普遍性》 178	地域固有の内容に関わらず成立するもの	41 31 10 82		22 18 14 54		21 10 11 42		<div>1952~1975 1996~2003</div> <div>14 28 8 50</div> <div>1975~1995 合計</div>
《場所性》 109	地域との関わりによって成立するもの	13 27 10 50		9		14 28 8 50		

表 6. 接点領域の広がりとその主題の対応の推移

			主題																		小計
			《普遍性》									《場所性》									
			コミュニティの形成				アイデンティティの定着					コミュニティの形成				アイデンティティの定着					
			利便性	親和性	共同性	その他	象徴性	景観性	文化性	風土性	小計	利便性	親和性	共同性	象徴性	景観性	文化性	風土性	その他	小計	
接点領域の広がり	イ	1952 ~ 1974	2	7	3	2	27			41		1	3	1	5	3			13		
			(14)			(27)				(1)				(12)							
		1975 ~ 1995	2	8	10	1	10			31	1	2	3	6		9	6		27		
			(21)			(10)				(6)				(21)							
	1996 ~ 2003	1	5	3		1			10		3	2		1	2	2		10			
			(9)			(1)				(5)				(5)							
	ロ	1952 ~ 1974	9	5	7		1			22		1		1	1				3		
			(21)			(1)				(1)				(2)							
		1975 ~ 1995	4	10	1	1	2			18		1	1		1		1		4		
		(16)			(2)				(2)				(2)								
1996 ~ 2003	2	9	2		1			14		1			1				2				
		(13)			(1)				(1)				(1)								
ハ	1952 ~ 1974		8	7		4	2		21		2	1	2	3	3	2	1	14			
			(15)			(6)			(3)					(11)							
	1975 ~ 1995	1	6		2	1			10		1	2	3	13	7	2		28			
		(9)			(1)				(3)				(25)								
1996 ~ 2003	3	2	4	1	1			11		1		4		3			8				
		(10)			(1)				(1)				(7)								

NO. 39 SK7107 横文彦 『回想としての広場考』

「Aという人間の領域感と、Bという人の領域間があると重なったときに、AとBとの間にある種のCommunalityという空間を介して出会うの場が生じたと考えてよいのではなからうか。…少なくともその建物を使用する人に対しては、ある種のアイデンティティのもっと直接的な場を与えると同時に、通りすがりの人びとにも何らかの関係を与える試みも重要な目的であったといえる。…こんなところからなにか建物そのものの領域を拡張して大きな手をひろげることによって、いろいろな人びとに出会うの場を与えることはできないか。…このようなひろげた手のひとつとして広場の意味を認識することができるのではないかな。少なくとも私にとって、広場とか建物の外延の空間はこのような手であったことにほぼ間違いない」

■接点領域
→広場、建物内部→A2-C→敷地内・複数領域
●主題
→〈接触・交流の場をつくる〉【共同性】《普遍性》

5. 接点領域とその主題の対応

前章まで、接点領域とその主題の意味内容を別々に検討してきたが、本章ではそれらの対応を検討する。まず、接点領域の広がりイ、ロ、ハと、その主題の大枠である《普遍性》と《場所性》との対応関係を検討した(表5)。その結果、《普遍性》に比べて《場所性》が、イ(50)、ロ(9)に対し、ハ(50)が極端に少ないことが読みとれる。このことは、建築家が地域に根ざした内容を語る場合(《場所性》)には、建築の単独の領域に限定して意味を付加する(イ)か、自らの創作が及ばない範囲である敷地外の領域と建築の領域とを結びつけることによって意味を形成する(ハ)かのどちらかであり、自ら設計する建築の領域同士の関係によって、地域独自の内容を構想すること(ロ)はまれであるという傾向を示すものと考えられる。さらにこれは同時に、敷地内の領域同士の関係が市庁舎建築一般の事柄とともに語られる固定化した傾向を示すものであり、今後《場所性》の内容と共に敷地内の領域同士の関係を構想することで、市庁舎建築の新しい表現が可能であることを示唆するものであると考えられる。また、接点領域とその主題の対応の推移を細かくみると(表6)、上記の傾向は、1970年中頃から1990年代中頃における《場所性》のイの【文化性】と、《場所性》のハの【景観】が中心的内容であることがわかる。さらに、この1970年中頃から1990年代中頃の前後(1970年中頃以前と1990年中頃以降)の《場所性》のイとハについて、『アイデンティティの定着』と『コミュニティの形成』との割合をそれぞれ比較検討すると、

《場所性》のハはほとんど差がみられないのに対し《場所性》のイは、1990年代後半以降の『コミュニティの形成』の割合が高くなっている。これらは、前章で示した建築家の地域社会に関する思考が『アイデンティティの定着』から『コミュニティの形成』に推移していることを、《場所性》のイ、つまり建築の単独の領域に限定して意味を付加する場合が顕著に示している。また、《普遍性》における『アイデンティティの定着』のイに関する内容は、1970年代中頃までは多かったが、その後は極端に減少している。これは、前章で示した接点領域の広がりにおける〔非隣接〕から〔隣接〕への推移は、1970年代以降の建築家の地域性に関する思考が《普遍性》における『アイデンティティの定着』の【象徴性】から『コミュニティの形成』の【親和性】【共同性】へと移行したことによるものであることを示していると考えられることができる。

6. 結

本論は、建築家によって著された戦後の市庁舎建築の設計論の中から、地域社会との関わりが主題となっている領域(接点領域)を抽出し、その主題の意味内容とともに検討することで、現代日本の建築家の考える地域性の意味の広がりを示した。そのためにまず、ここで取り上げた資料において抽出した接点領域を整理し、接点領域の広がりとして、敷地内において他の領域と関係をもたないもの、敷地内において複数の領域と関係をもつもの、敷地外領域と関係をもつものの3つのまとまりとして大枠とらえた。次にそのことを前提として、個々の接点領域における

主題の意味内容を KJ 法をもとに分類・整理することから、建築家の地域性に関する意味内容の関係図を示した。その結果それらはコミュニティの形成とアイデンティティの定着として大枠捉えることができた。さらに、それらを地域に根ざした内容として語られる場所性と、地域の固有な内容と関わりなく語られる普遍性の 2 つの側面によって位置づけた。またひとつの論説で複数の接点領域とその主題の意味内容を読みとることができることから、資料とした論説毎の通時的傾向を考察した。その結果、建築家の地域社会に関する思考は基本的に一般化、普遍化を伴うことを前提に、1970 年代中頃と 1990 年代中頃を境として建築家の地域性に関する思考が推移していることを示した。さらにこの結果をもとに接点領域とその主題毎の推移を示し、建築家の地域社会に関する思考がアイデンティティの定着から、コミュニティの形成へと推移し、90 年代後半以降はアイデンティティの定着に関する意識が希薄になってきたこと。また近年の建築家の地域性に関する内容が、領域相互の関係によるものが多く、とくに敷地周辺の領域から建物の内部領域を含めた領域の階層的連続性へと推移していることを示した。最後に、接点領域とその主題の対応とその推移から、地域固有の内容に関わりなく成立する普遍性は、1970 年前半まで建築の単独の領域に象徴的な意味を付加する内容が中心であったが、1970 年後半以降は複数の領域同士の関係性から共同意識を高める思考へ重心が推移していること、また地域に根ざした場所性は、建築の単独の領域に歴史的、風土的意味を付加するか、敷地外領域と建物の領域とを結びつけ景観的連続性を思考するかのどちらかであることといった、市庁舎建築の設計論において建築家の考える地域性における普遍性と場所性に関する傾向をみちびいた。

以上ここでの結果は、これまで曖昧であった市庁舎建築の設計論における建築家の思考の枠組みを明らかにすると同時に、建物を社会的に意義あるものに位置づける建築家の社会的枠組みに関する思考の一端を明らかにするものである。これらの内容を相対的に考察することは、今後の市庁舎建築をより開かれたものとするための有効な設計論的視座を得られるものと考えている。

注

- 1) 1953 年（昭和 28）年 10 月に実施された「市町村合併促進法」により多くの新しい市がつくられた。現在（平成 16 年 10 月 4 日現在）では、全国に 3,029 の市町村がある。
- 2) 建築大辞典 707 頁（第 2 版、彰国社）には、「市庁舎:city hall:市（地方公共団体）の庁舎、市議会関係の部分と行政関係の部分に分かれる。中央官庁と異なり市民に直接サービスする仕事が多い。」とある。また、同じく建築大辞典 714 頁（第 2 版、彰国社）には、「シティ・ホール:city hall:ヨーロッパで古くから見られる市民活動の場。行政活動、文化活動、商業活動など都市に必要な活動が行われる。通常の市庁舎は行政の場という性格が強いのに対し、市民参加のシンボルとして市民相互の交流を図る場というニュアンスがある。」とある。
- 3) 谷川大輔、奥山信一：現代日本の建築家の設計論における公共性 建築設計論における社会的枠組みに関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 550 号、pp157-164, 2001. 12
- 4) 近藤正一、村瀬宏典、太田英和、夏目欣昇、若山滋：大正から昭和中期における建築家の建築家の言説 キーワードの「カテゴリー」による建築思潮の変遷、日本建築学会計画系論文集、第 578 号、pp207-212, 2004. 4
- 5) 太田英和、近藤正一、夏目欣昇、若山滋：日本デザイン創生期における建築家の言説の論理構造、日本建築学会計画系論文集、第 578 号、pp213-218, 2004. 4。ここで用いている批評対象と対批評対象という用語は太田英和らの論文からの引用であり、建築家（評論家含む）がある主題に対して批評を述べた部分を批評対象、また同時に論者の価値観や主張が読みとれる部分を対批評対象としている。
- 6) 山本英史、大垣直明：庁舎機能の市民開放に関する基礎的研究 日本建築学会計画系論文集 第 558 号、pp129-135, 2002. 8
- 7) 中井邦夫、坂本一成：現代日本の市庁舎建築における空間構成と用途の分節外形「ボリューム」の分節における建築の構成形式に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 519 号、pp117-122, 1999. 5 など
- 8) 本論では設計論を、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、

具体化の方法などを著したものと定義する。このような意味における、著書、論文は膨大にある。したがって、すべてを把握することはできないが、本論では、設計した建物が建築雑誌に発表され、それと同時に掲載された論文をともに設計論としている。ここでは、一般建築ジャーナリズムを現代の建築家のもっとも自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌を対象としている。対象とする期間は、市庁舎建築が制度・政策の影響を大きく受けることを考慮して、現在の政治制度となった戦後（1945 年）から現在（2003 年）までとする。この範囲の中で、最も代表的な 89 の論説を対象としている。また、日本の全ての市庁舎建築作品、および町村役場、東京都の区庁舎建築を資料として扱う。規模、部門的な用途の構成が市庁舎と異なる都道府県の庁舎は資料としていない。

- 9) ここで接点領域の内部領域における具体的要素の内容は、平成 16 年 4 月にまとめられた文部科学省施設整備に関する技術的基準にある計画関連「新営一般庁舎面積算定基準（統一基準）」の区分をもとに設定・分類している。
- 10) 内部領域 A1 として抽出された 65 のうち、執務部が 42、執行部が 6、議会部が 17 抽出され、相対的に執務部が 6 割以上を占め、その中でも窓口事務が半数以上を占めるため、執務部の窓口事務が多いとしている。
- 11) 内部領域 A2 として抽出された 164 のうち、窓口部が 46、付属部が 92、議会部が 26 抽出され、相対的に付属部が 5 割強を占め、その中でも市民ホールが 7 割以上を占めるため、付属部の市民ホールが多いとしている。
- 12) 寺内美紀子、坂本一成、奥山信一：建築の外部空間の分節と配置形式 領域的性格からみた建築の外部空間の構成形式に関する研究、日本建築学会計画系論文集、第 491 号、pp91-98, 1997. 1 では、建物を立体的なボリュームに還元して捉えた際それが敷地に配置されることによって残部として分節される外部空間を「配置による外部」、建物のボリューム内、あるいはそれに付随して、屋根、壁、柱、といった具体的な要素の操作によって分節された外部空間を「建築化された外部」としている。本論では、外部領域の具体的な要素の分類において、上記の内容を引用して用いている。
- 13) 寺内美紀子、坂本一成、奥山信一、小川次郎：現代日本の建築作品における外部領域要素の配列 領域的性格からみた建築の外部空間の構成形式に関する研究（3）、日本建築学会計画系論文集、第 543 号、pp131-138, 2001. 7 では、外部空間を構成する要素を建物やバナーなどの構築物を「人工的要素」とし、樹木、築山、芝生等は「自然的要素」として位置づけている。本論では、敷地外領域における領域要素の分類において、上記の内容を引用して用いている。
- 14) かっこ内数字は、分母は接点領域の広がり、分子はイ、ロ、ハ各接点領域の広がり、のまとまり毎の小計を表している。
- 15) KJ 法とは、民族地理学の分野で川喜田二郎氏によって考案されたものとしてよく知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法の実施検証のプロセスまでの一連の方法を言う。ここでは、上記のなかで、ある問題をめぐって関係のありそうな情報を集め、定性的データと意味の分かるような全体像とするまでのプロセスを狭義での KJ 法としている。川喜田二郎：KJ 法、発想法、統発想法、中央公論社、1996. 3。本論では、著者 3 名が中心となって資料の内容の「グループ」の作業を何度もフィードバックしながらおこなない、繰り返し検討・検証することで最終的に作成した図の客観性を高めるように努めた。またここで提示した図は、市庁舎建築の設計論における主題の関係を示すとともに今後の市庁舎建築の設計において新しい発想を促す方向性をみいだすことを目指して作成した。
- 16) 図 1 において類似した内容を持ち「場所性」と「普遍性」によって分類したものは点線で結んだ。
- 17) 本論では、市庁舎建築における接点領域の主題を分析した結果として得られたカテゴリに下記のような 4 種類のかっこを用いて対応している。それらは主題の意味内容のまとまりが、意味の大小関係によっていくつかの水準の包含関係で示されているため、本論の中で同水準のカテゴリを視覚的に明確化するためである。

《 》	主題カテゴリ項目	第一水準
『 』	主題カテゴリ項目	第二水準
【 】	主題カテゴリ項目	第三水準
〈 〉	主題カテゴリ項目	第四水準

- 18) かっこ内の数字は、資料とした論説の通し番号である。一つの論説より複数の主題が抽出されたものは、さらに添え記号を付けた。論説の通し番号は、表 2 の資料リストに対応している。
- 19) ここで「都市組織」とは、資料論説中他の部分に「歴史のある町および文化的生活を支える機能の活発な都市に見られるような都市組成」（sk8407 NO. 58-a『苦小牧市庁舎の建築について』岡田新一 対象建物:苦小牧市庁舎）とある。
- 20) この〈地域活性の中心となる〉は、前述の〈都市形成の核となる〉と類似した内容であるが、『3.3 接点領域における主題の〈場所性〉と〈普遍性〉』における、〈場所性〉と〈普遍性〉の差異によって 2 つを分類し位置付けている。
- 21) 別々のカテゴリ間で共有する番号が 2 つ以上もつものをカテゴリ同士線で結んでいる。これは一つの論説内で同時に語られていることを意味している。このうちシンボルをつくる」と共有する数は、〈文化・歴史を表現する〉9、〈存在感・風格を表現する〉8、〈風土性を表現する〉4 で、『アイデンティティの定着』の中でも【象徴性】が中心的内容であることを示している。またシンボルをつくる」は、〈集まりの場をつくる〉と 5、〈接触・交流の場をつくる〉と 4、番号を共有し『アイデンティティの定着』の枠組みを超えて関係をもつことから、接点領域における主題の中心的内容であると推察している。
- 22) 本論では具体的な場所に建つ建築の設計論を扱っているため、具体的な場所に関する内容から思考がはじまっていたとしても、最終的な建築家の思考が

一般的な内容へと向かっている場合は、《普遍性》として扱っている。また、ここでの分析、および検討の内容の一部は、谷川大輔・佐々木英子・奥山信一：市庁舎建築の設計論にみる社会と建築の接点となる領域 建築家の設計論における建築の社会性に関する研究 (1) 日本建築学会大会学術講演梗概集, PP685-689, 2004. 8 及び 市庁舎建築の設計論にみる社会と建築の接点における設計意図 建築家の設計論における建築の社会性に関する研究 (2) 日本建築学会大会学術講演梗概集, PP685-689, 2004. 8 において一部報告している。

- 23) 『コミュニティの形成』として抽出された主題は 170 あり、このうち《普遍性》に分類されるものが 148 で 9 割近く占めている。これに対して『アイデンティティの定着』として抽出された主題は 152 あり、このうち《場所性》のものが 98 で 6 割 5 分程度占めている。このために、『コミュニティの形成』は《普遍性》が、『アイデンティティの定着』は《場所性》が多いとしている。
- 24) 『アイデンティティの定着』の【象徴性】は、《普遍性》が 49、《場所性》が 16 で、《普遍性》が 7 割以上あるため、《普遍性》が多いとしている。
- 25) 資料とした 89 論説の中で、接点領域とその主題を複数述べるものが 78 論説あった。これは、全体の約 88% 程度を占める。
- 26) 1950 年代前半から 1970 年代前半までと、1970 年代後半から 1990 年代前半までは、『アイデンティティの定着』が『コミュニティの形成』の 4 倍から 5 倍程度であるのに対し、90 年代後半以降は、全体に比べると資料数は少ないが、約 2 倍程度になっている。
- 27) 1990 年代前半までは、イとロ＋ハの数はほぼ同数なのに対し、1990 年代後半以降は、ロ＋ハの数がイの 1.5 倍程度ある。

(2004年11月10日原稿受理, 2005年5月23日採用決定)